



零への試行  
—しづくの詩—

零への試行  
—しづくの詩—

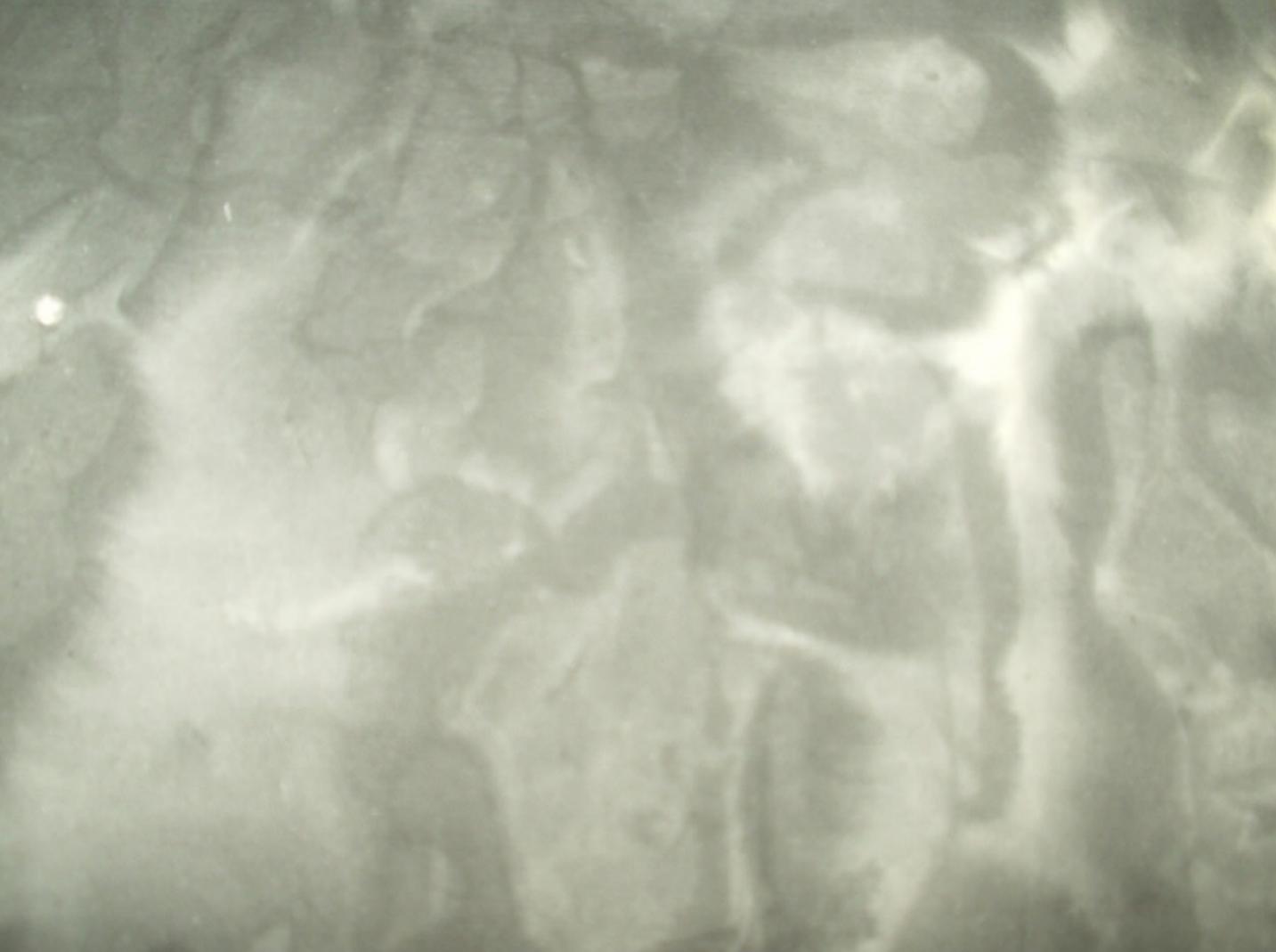
祝いの日から遠のいて  
赤い実こぼれ

幼いかたちは結ばれず  
青白い煙のゆくえ

薄い縁の家をでて  
穏やかな波、しぶきに  
こなごなの期待  
片々 遠い旅にでよう

海が消え

流れをせき止められた水は  
山の緑と空の青で  
神妙に染め上げられ



沈積した限りない死が  
半身麻醉の鈍痛と嘔吐の夜となる

見送りの傷が沁みた風が吹いている

この世のことをこれ限り  
箱の中に空の青

糸の結び目とけた風船

追いかけて

追いかけて

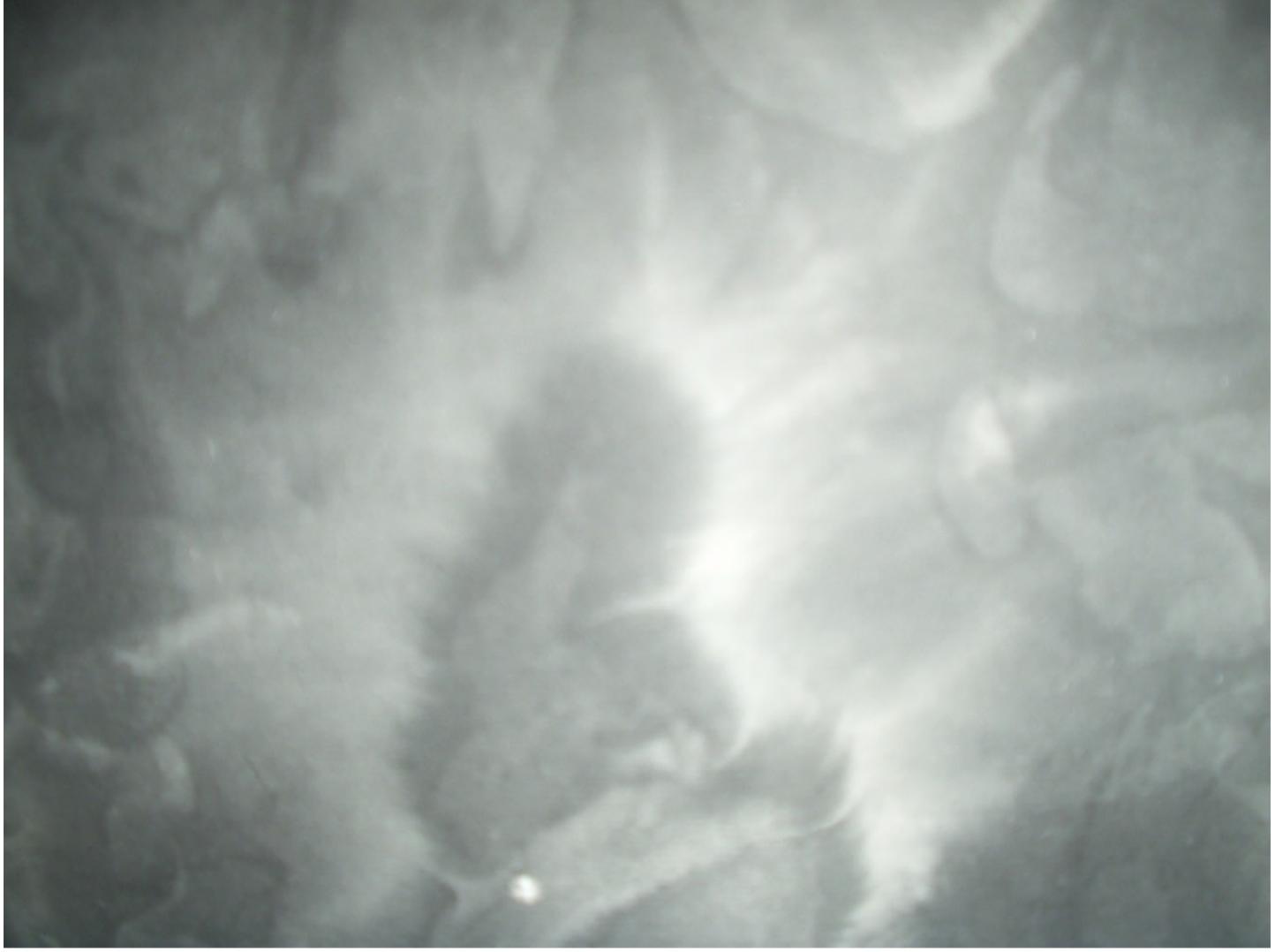
シシリ一島の岬に住む

海の精

歌声を船乗りの幸せに

座礁した地に

咲き乱れるのは  
けしの花



むこうに水が流れる

ゆつたりと手招きの柳の緑

幽谷の地

影絵の舟人

秋に満ちる金木犀の花に機縁する

璃江下り

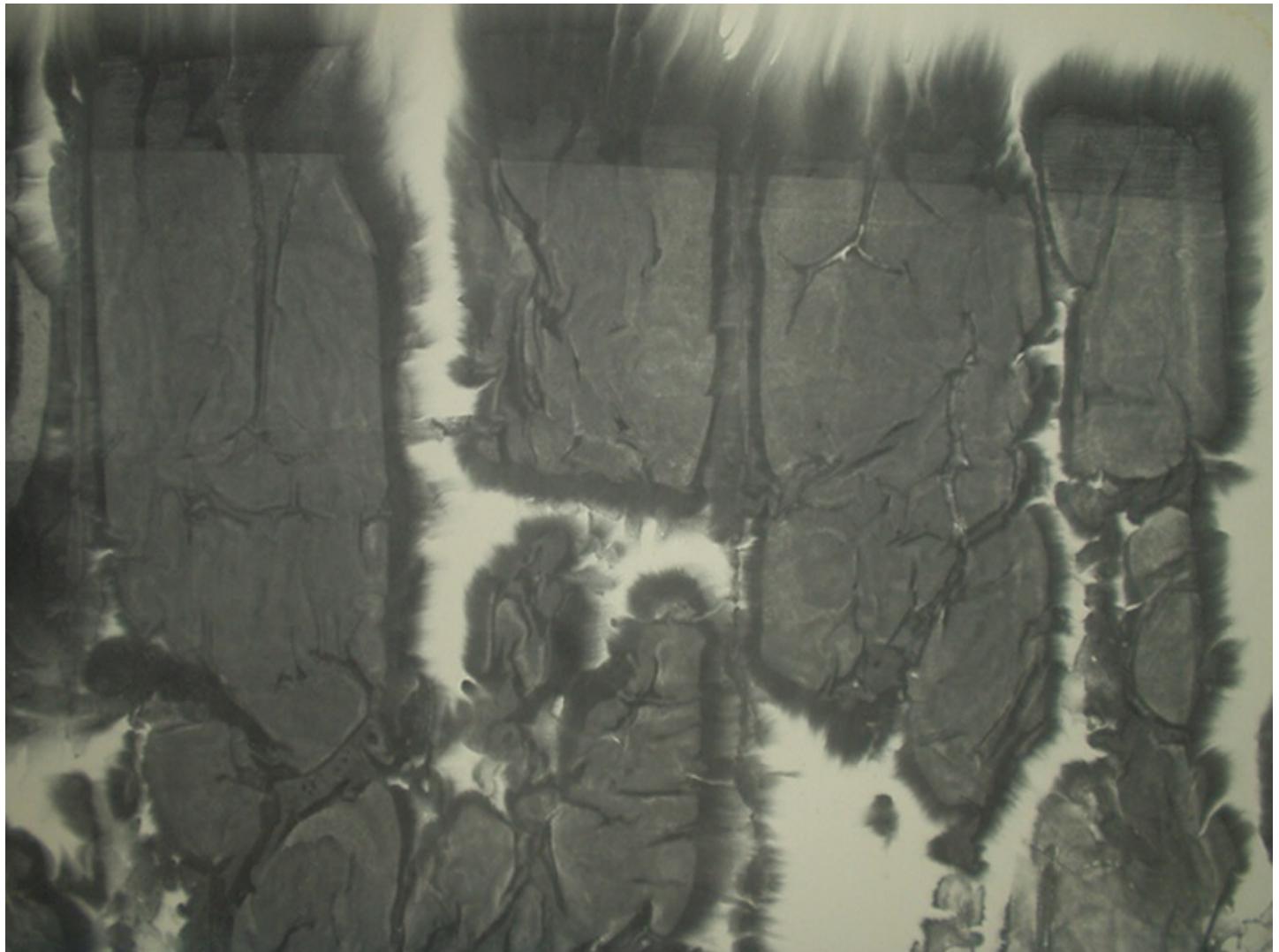
船尾に声のない鶴

川辺を走る子供たち

船から菓子が投げられて  
奪い合う子が水に倒れる

たも網で流れでゆく菓子袋を  
掬いあげる

渴水期の川下り  
干上がった川辺



海の息の根をしめて

多量の油

岩々にこびりついた

漁師が涙

羽をひろげられない鳥

波打ち際の生き死に

誰も予期せず意思のないところで

こんなにふりつもる重い油

世界で十三番目に大きい淡水湖

Highest Recorded 40°C

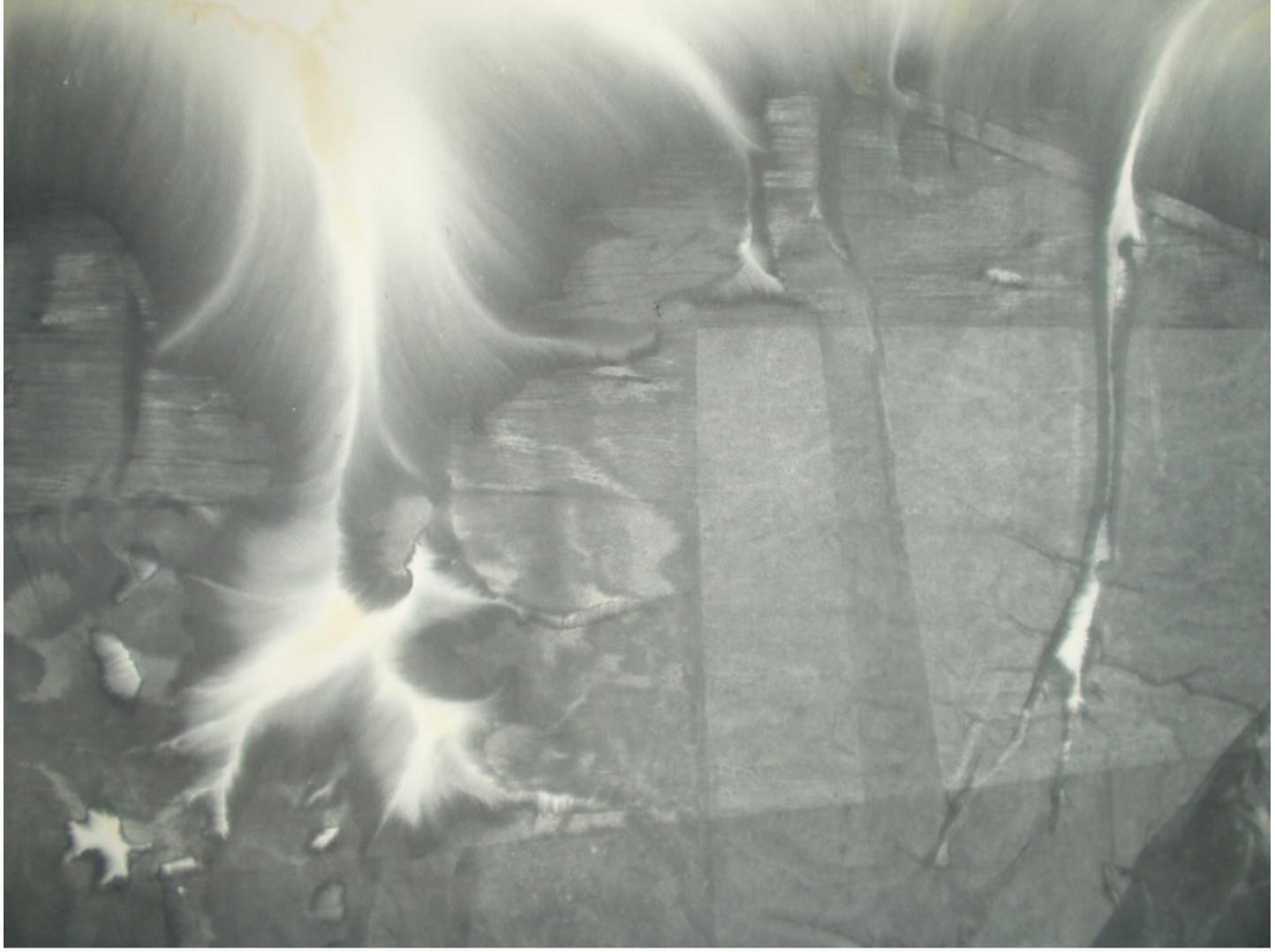
Lowest Recorded マイナス46°C

人々の歩く小雨の湖畔

ボートの群れを

深く眠らせ

しづまりかえる



水面

広大なカナダの黒い土には  
小麦の種が蒔かれた後に雪が降り  
1トンの作物のために

30トンの表土を失うという

南アフリカ

処理しきれないゴミが

越境しさまよい始めている日本

生きるという

肉体の欲求をかかえ人の魂は  
どこまで自在な表情を保つ湖を  
まねていられるか

林中の水音が聞こえる

地中の旅は長く続き



いま、

澄明な空間を

光がしめす方向へ

人からの

それぞれの波と感覚を内包する水の滴り  
時を待つ

異国からのみやげ物

共鳴のひみつ

壁の壺

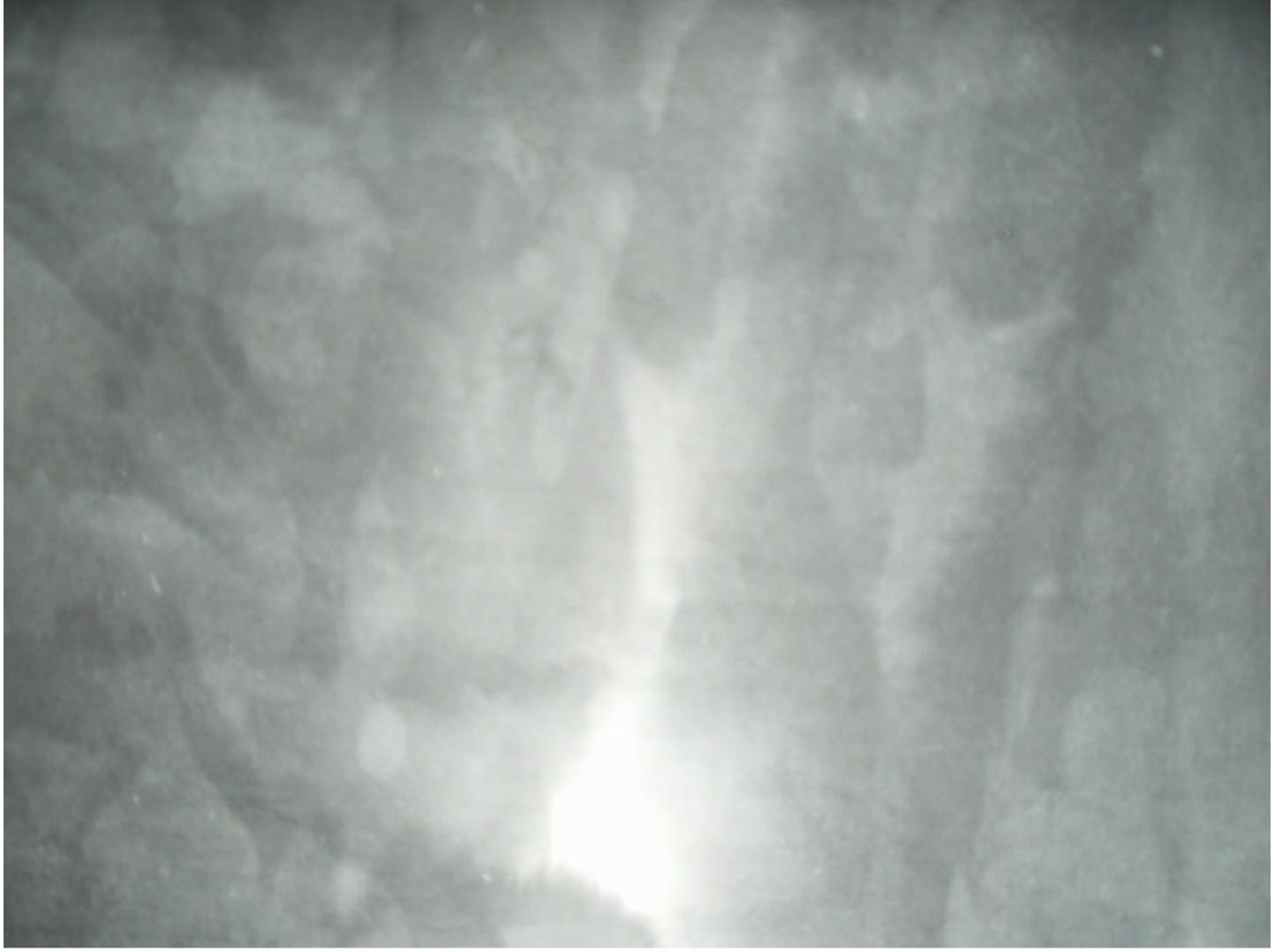
林の中でひとつ水の滴り

響き

日に照らされながらの

小雨

川に沿つて続く道を乗り合いバスが



野の花が

何十年も前の飛び火

すべての家々を灰にしたとき  
なにごともなかつた寺の離れ家

暮らしの水は庭そばの四本ノ杉の木の根元から  
手折るほおずき

八年以上のシベリア抑留

死の淘汰

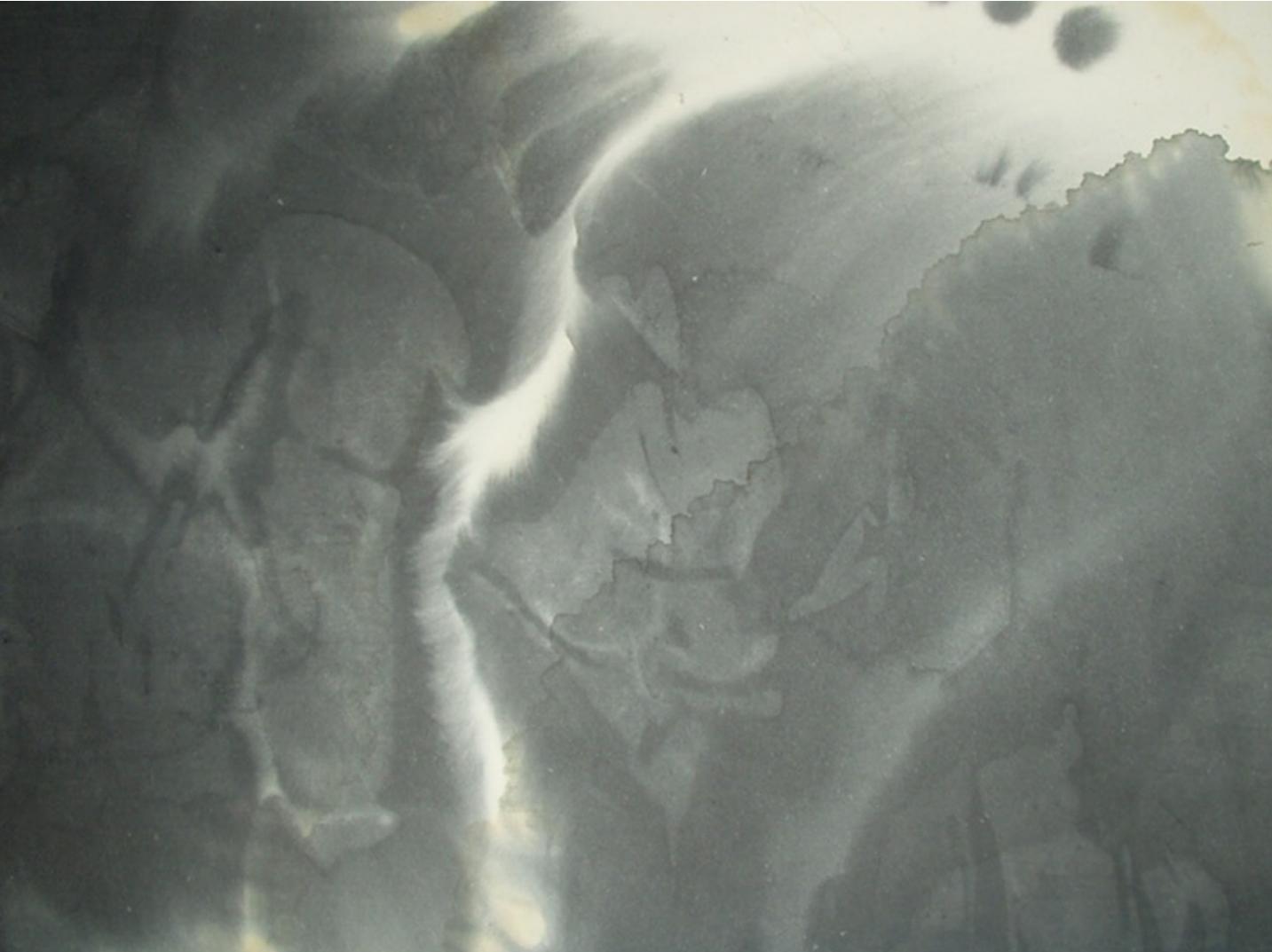
日常に狂気の再体験

女一人の過去

透きとおる昏々とした影

雨粒の旅の途中

薄、萩の葉上のやわらぎ



吸い込まれ行く

太陽系の球形

零れ落ちないバランス

生命の緊張

鬱積したエネルギーの消化

自然の営為に息をし

一滴

つゆ

あふれる多様

体にめぐる古代

思惑ありげな枯れ葉の雨

風

初めてかわした会話

混在する自由の魅惑



適度の香り

皮膚を通過する月

痛む腰にとどこおる水

正常な脳にみちる涙はうずくまる

夜にみた夢は

深い水底を背に

緩やかな波が耳に残り

首から下のかるみ

まぎれた魚の泳ぎやめるとき  
網にかかる制限のない広さと

行き着いた

ガラスの水槽

やさしい眼の内の

竹林の自由



井戸跡にこもる歴史の継承にふる言葉  
たちどまる違う世の水のみ場

人のふつうの行為

列車が走りさる緑のいろどり  
川に誘い隠れ住む翳り

朽ちて沈む闇

列車の乗客になる仮眠の透明

神秘と恐怖の交わりに  
列をつくる山道の笑顔

眼の前を狙つて

小さなモノが飛ぶ

長い前髪の

まるい大根の葉の花



近寄る乳腺

遊覧船にあふれる空と歎声

悲しい橋を残して

住処に帰る水の振動

水が流れる

白い蛇の闇の中で

いよいよ激しい滝の姿態

飛沫は延命のお滝口でくねる

走る

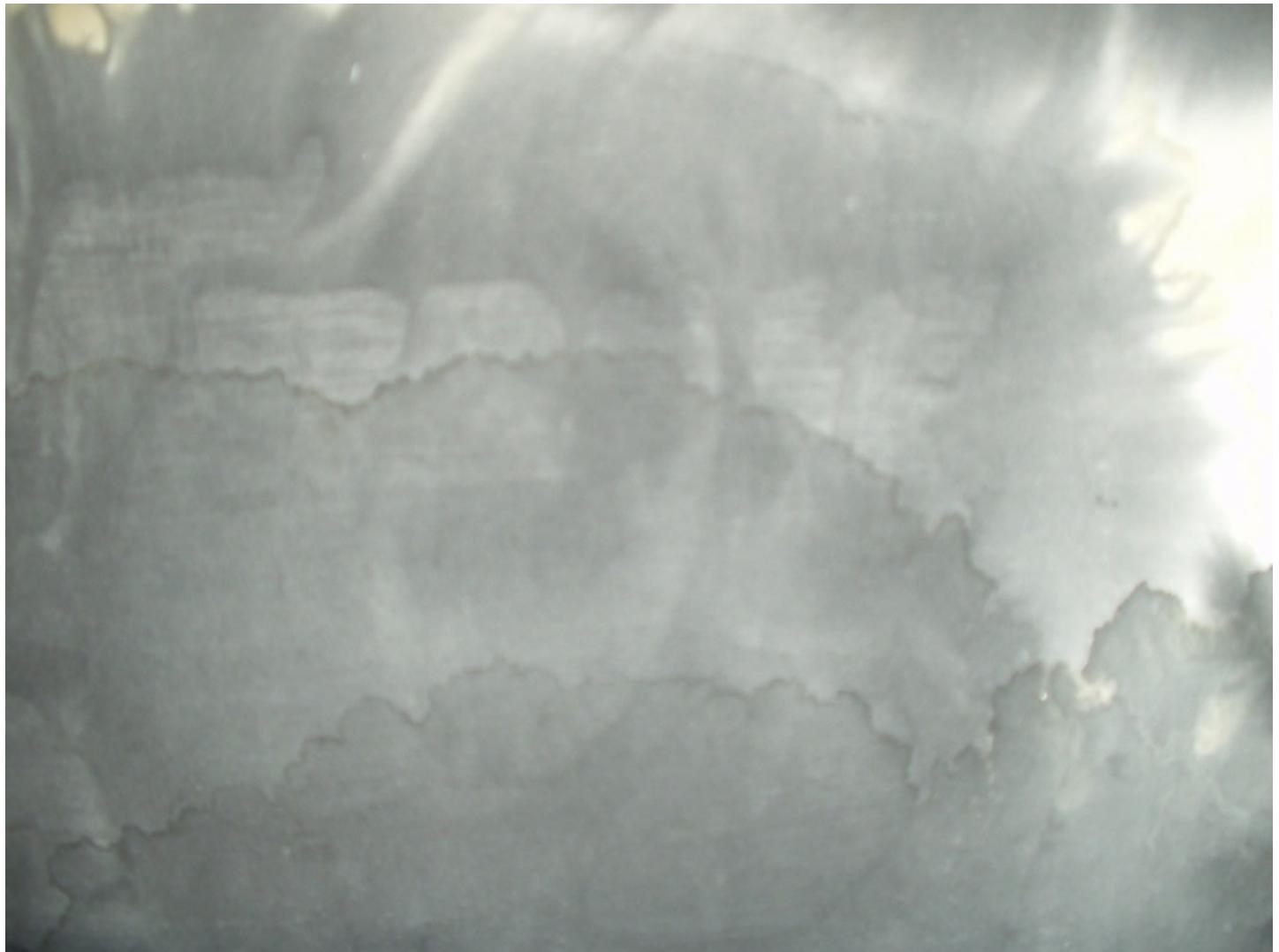
飲む

まわる

白い日傘

恋する

川原の少女



世界に半歩距離をおく

気配のあぜ道

昨日までのこの世人

平静とかび色のにじみ

ひからびた蓄えの

命

あかり吹く立ち入り禁止のフェンス

立ち直れない用水路の表情

こごえ

木の枝、朝の色、夜の色

垣根のうめき

精一杯の逆流

縦横にさまよう魂

沈黙の中でふくらむ太陽の巡り

声ももらさず



水もしたたらせず

ひきつなぐ

あふれそくな人間の手足

高揚の垢

枕辺にしおびよる虹色の衣装

千変万化の闇夜の浸食

夜更けの感傷もひといろ

風呂場の窓にふくらむいく粒かの  
つぶやき

逢いたい

悪寒と余白

狭いクローン

身繕いする住居

群れをみつめる流れ



ある日水上マーケットの観光客は溺死する

船の濃度

ラン藻類の浮遊

褐色の細胞の集合

不安げな華の毒がはなつ

自我の妄執

氷の凝縮

片々は融けない窓の光射す真ん中  
見透かした笑顔の楽園にのびる

退廃の指折り

想起する手のひら

屹立する君の描いた弧

天空の闇



流れの早い雲

切れ間に気配する

光

乞えば

にわかな絶対の月

その円

光にのばされる腕のぬくもり

君の描いた弧の孤独

届く雨にふくまれていた

手にふれる肌

白い楓

落ちてゆく夜の

回廊の水影

あふれていた水を止めて



タイヤの重みに  
はねる歌声

覚めて

走る汽車の熱  
カラスの夢が  
シャボン玉とふくらんで

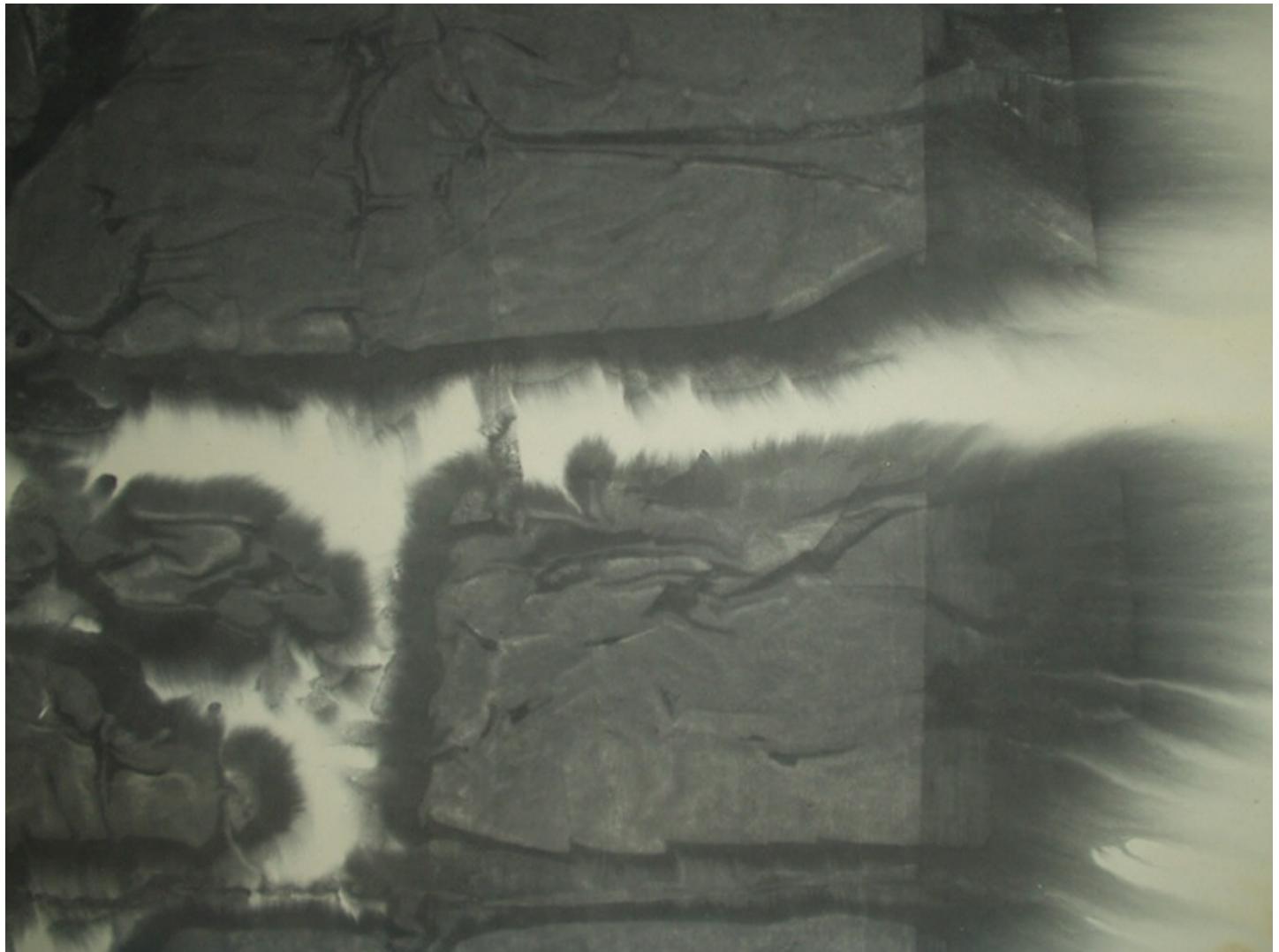
机のうえの白い紙に  
流れるシミ

拾い集めた思い出の  
砂糖のかたまり

足踏みしている

夕ぐれ

軽み  
独りの不安をかざる



老いてゆく

ハイヒールのかかとについた土  
どこにもいけないあこがれが  
炎にとけて

ジプシーの影

寝転んで

畳の上に蛾が  
木の葉のカーテンをまく  
おしこめた夜のさみしさ

喜びに対応する氷の

薄いきらめき

陽のかたまる宝石

しづくのつらなりに歩く表戸

紅いポストからはみでる手紙



病に眠る

薬が疲労する

夜着にはなれない

飴色の道の安住

川辺に消えた螢

破滅の充満

圧縮される紙の残骸

赤いトマトに

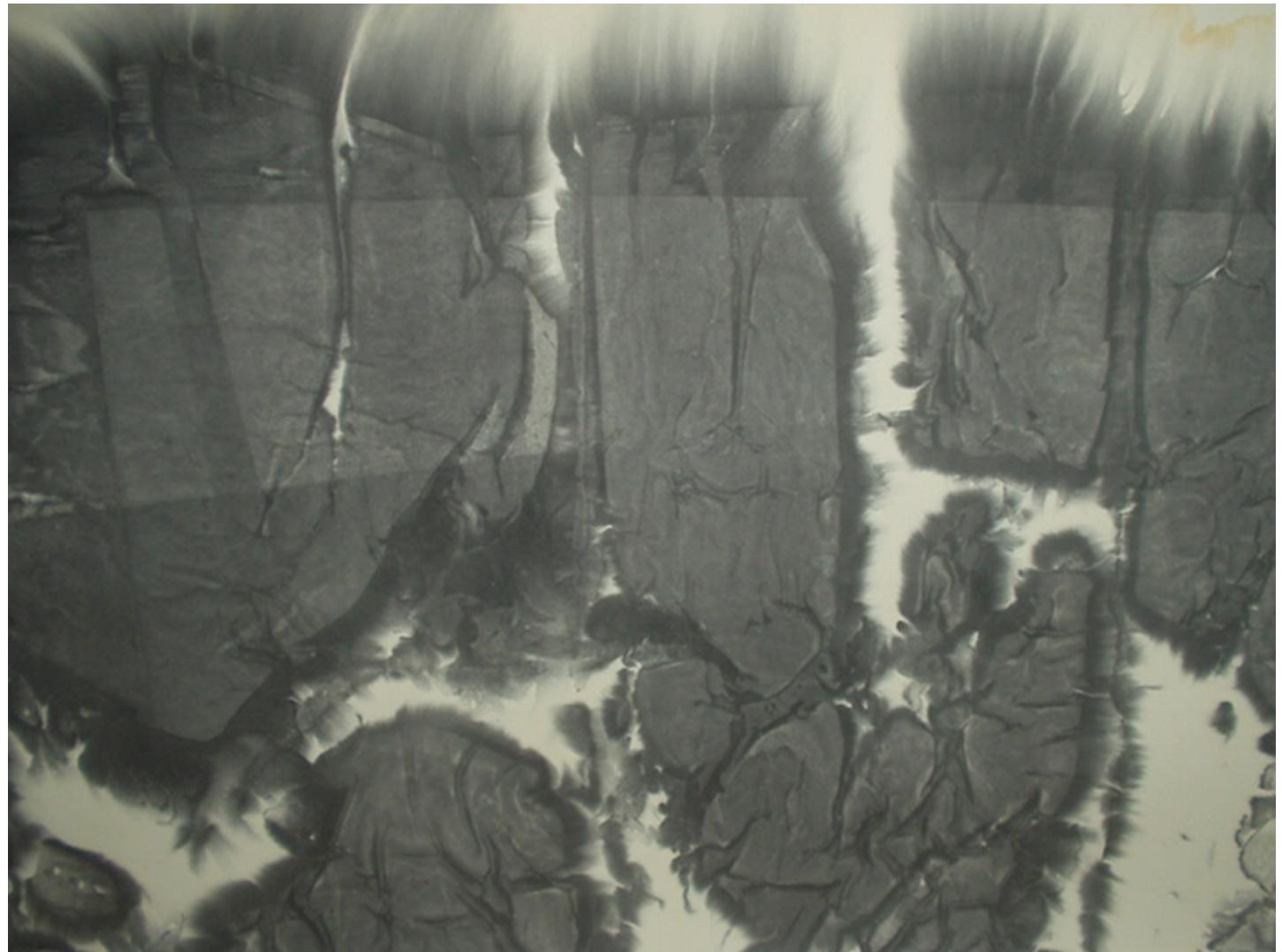
橋の欄干が浮く

舟になるわたし

針のない遠い眼の陽炎

水を汲んで歩き出す旅人の

あとを追う風



身を低く低く

長い髪が街の片隅に溺れて

何も生まれない

葉脈のおとしもの

想念をこえる

水が霧のように風に流れる  
白い布をまとつた男たちが

さまよう

雷がなる

白い椅子がよつつ

まるく眠つてゐる

一瞬の光

腹に手をあてて女の赤い髪が泣いた

闇がゆつくりと窓をしめた

音だけがひびく闇



雨が粒で落下する  
湖につきでた桟橋

とぎれるむこう

広がる世界

肉塊が飛翔する

無言の声の方向

ヨーグルトのつもる

時計の花

ささやきと

深い眠り

繁殖をつづける隣の空隙

埋める

こんなところの墓標に  
死者の緑のツメ

空から

開かなかつたパラシユート

衝撃波がのみこんだ

この世の音

灯りに迷い込んだ

両手の中の震える風

回れ回れと

舞台が香をまきちらす

たよりない形の

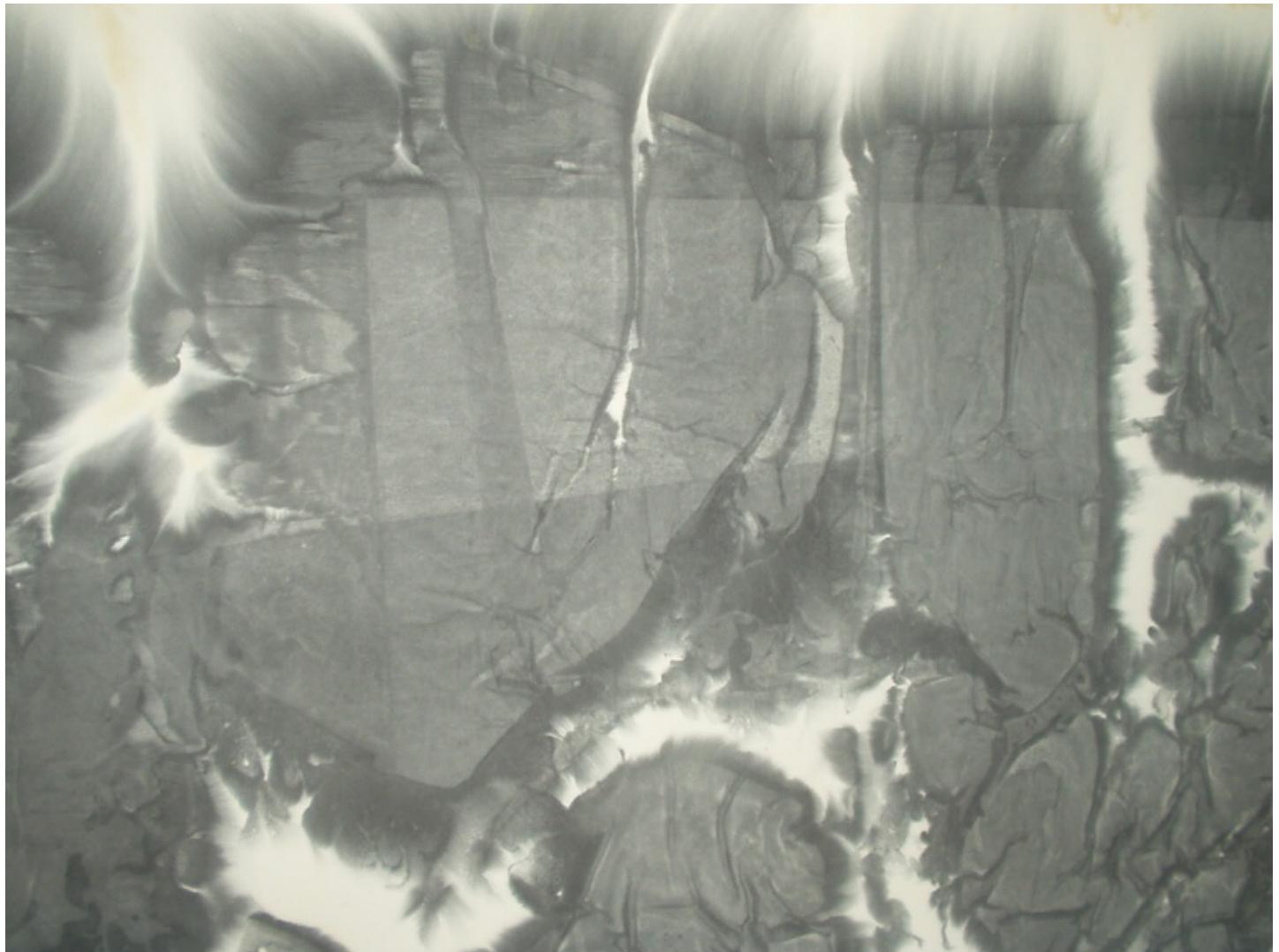
人形が

甘い菓子の入っていた大きな箱の中で

崩れる

億劫な嘆き

ひかれあう季節



絡まつて白く泣く波  
その水がバケツの底を這う

届かないことば  
離れてゆく望み  
うつろいゆく記憶  
たちあげる埋没

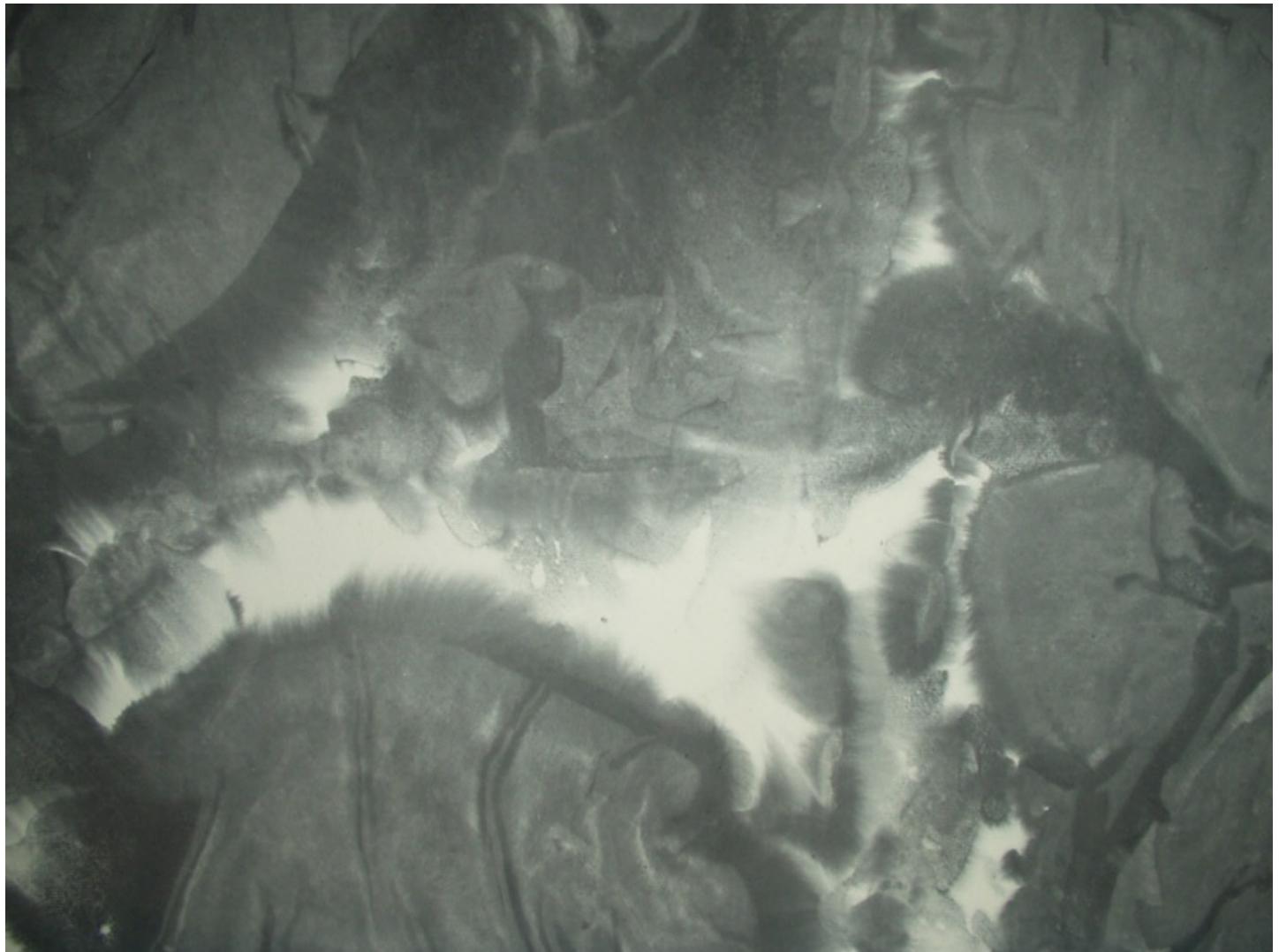
満ちている

如月

黒いコートの女にからまる  
赤い糸の枯れ枝

香らない花

山道の全宇宙  
道幅もしらず  
午後の陽翳り



花は枯れ

葉がくちて

存在の根が水を汲む

企てのなく

魂を叫ばず

意思でなく存在する

継続

絶滅

高くなだれ

切り立つ

滝の水煙

気分のいい散策

神もやすむ泉

洞窟のある渓谷



この街のみどり

川原石

大らかで豊かな優雅

泳ぐ身を隠す滝あたりの神橋の  
神秘の深み

天岩戸の神代の物語

高いところの一心行

滅ぼされた数百年の山桜

一心行の

天にとびだして

つまりは

地中に埋まる

死んだものはことば



溶け出した穂の揺れ

水溜りに遠来の使者

風にまかせて散らばつた

月火日土水金木土水

なにごとでもない日

何の日でもないひ

確かめたがる夜は

数えない影をおとして

人体への熱伝導

手のひらに集まる汗

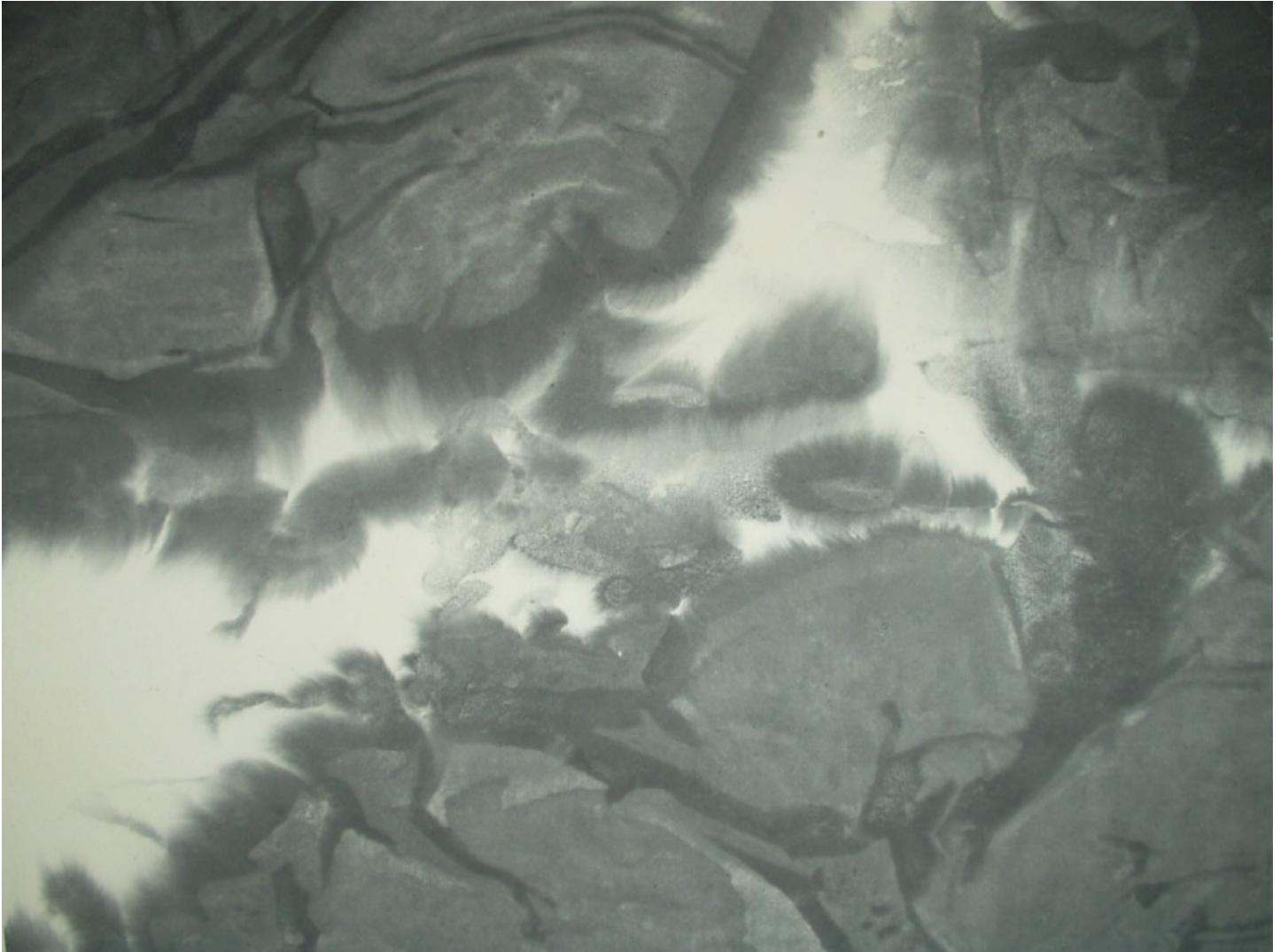
埋めてゆく円

出入りする日常の渴望

螺旋の影の冤罪

雪山のゼロ

光の曳航



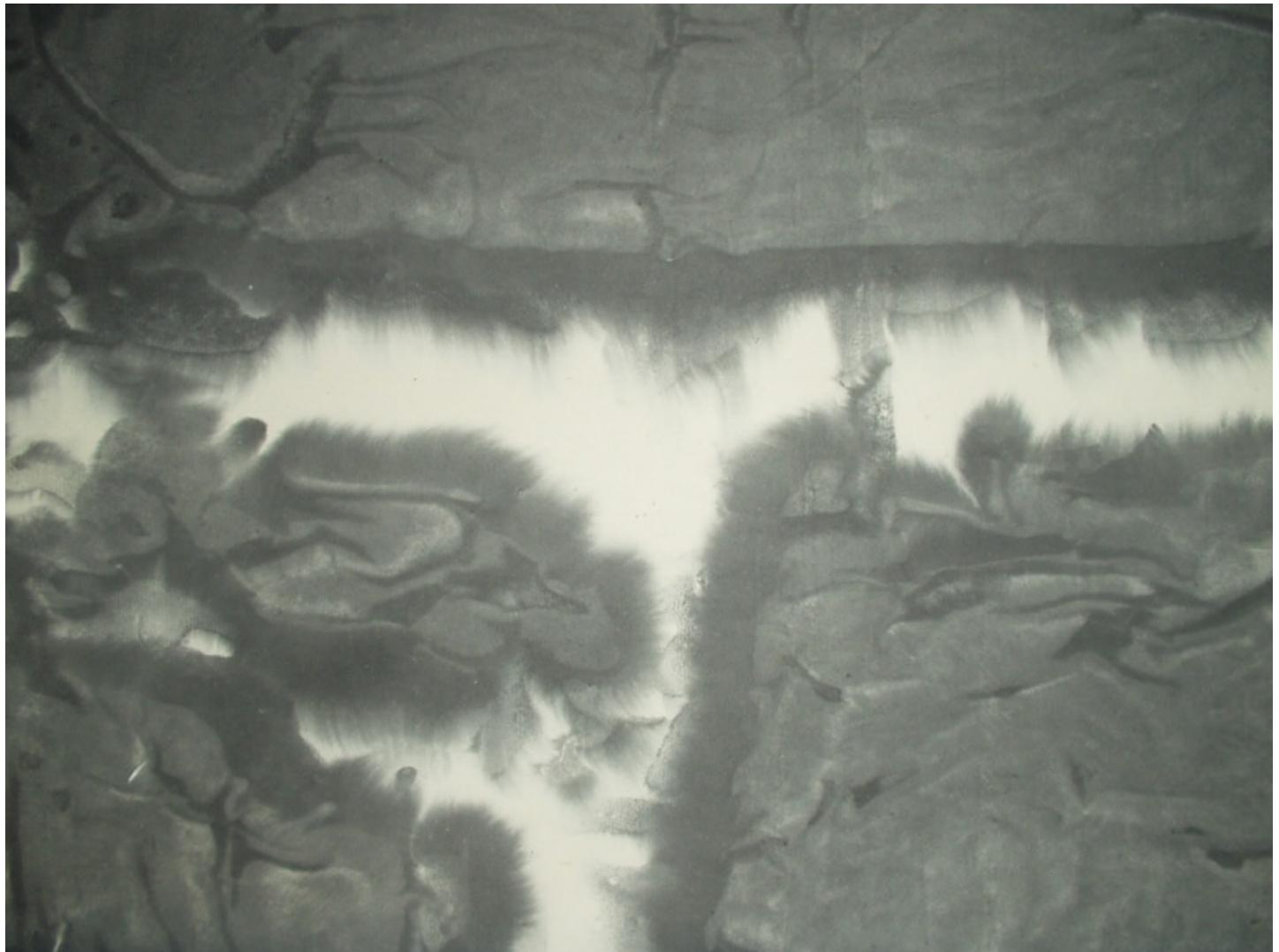
虹 露 雨 霧 溜まり 分離 相対 合一

いくつもの輪のはなし

ほつほつと解かれる筋  
飛翔へのさまよえる心情

うつろう正体

疲労の停滞に現像される熱の



崩壊

消失からの道

目覚めた右の目

左にある目

向かい合つてもまれた飛沫

風に散らされた花がやすらぐ

千と線

白い壁にのこした

踊り

宿主のない殻  
しじま



匂う

ひかりのしづく

攪拌の塵

の一遍

記憶の白紙の四方

ふくらんでゆく探し

じつとした気配

蝶の羽の重なり

低く地は翳り

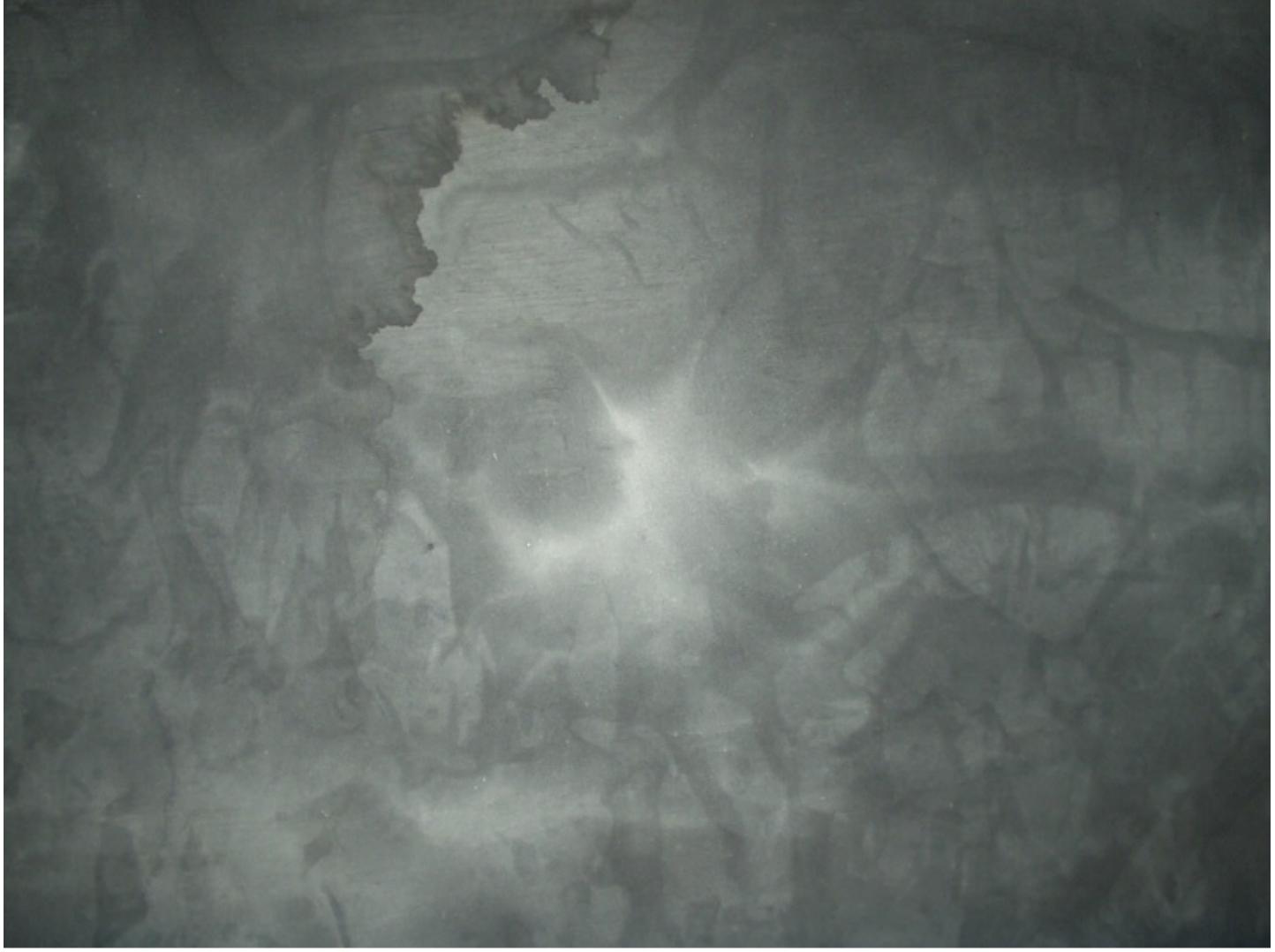
とまどつた識の冷たさ

風化する砂漠の死

ひざまずきなぞる背の骨

論すように

手からこぼれるしづく



陽気な噴水の赤い花

新生

無邪気をよそおう

晴れ

刻印される

無数の指紋

ひなたの花粉

たましいはここにはない

迷い込んだトカゲの手

はりついて

丸い粒の指先

上の弧と下の弧が小さく結ばれた瞳  
線香のけむりのたなびき

寿命がとける



開放された日

意味の無

一番きれいだったころの着物

簾笥の中の水気

昨夜のざわめき

そなえおいた声

円のしつらい

階段を逃れてゆく

日没

暗がりでの出会い

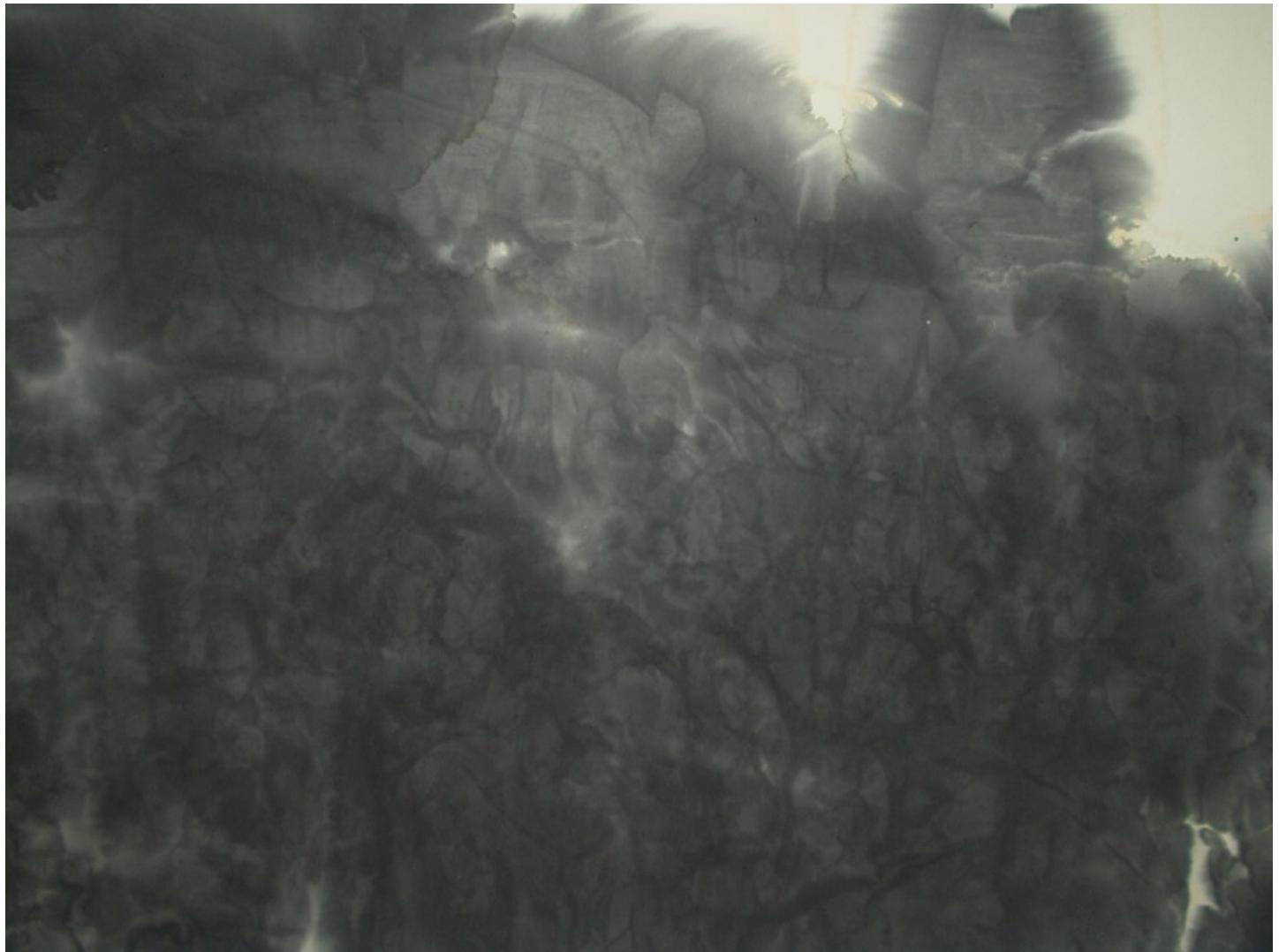
稜線の月

雲をはなれて

すがた

天空のたかみへ進む

輝きの一條



月に掬われる身

水の青が深まって  
正体のつかみきれない水底のひろがり

原罪のすみか

姿さまざまに

目撃される未確認動物

ウイルスの繁殖

不可解に占拠されるささやかなひととき

太陽がのぼり

月が満ち



細胞はおとろえ

山崩れの予兆に  
こぼれる小石

数をかぞえないで

時をつくらないで

空にある

太陽、月、星の動きに  
身体そわせて  
地の交わりの縁を開放し

わたしとは水のしづくに映る影